

---

## 「回顧と展望」

伊藤 克敏

「歲月人を待たず」という諺があるが、犬飼前所長からバトンを受取ってから早や6年の歳月が流れてしまった。

限られたスペースではあるが、過去6年を振り返り、今後への抱負の一端を述べ度い。初年度の1987年には、11月25日に「本学における語学教育のあり方」と題したシンポジウムが開かれ、一般外国語、一般英語教育、各学部の代表が出席し、各々の立場より提案がなされた。主なものを紹介しておくとして、①少人数クラス（20～25名）の確立、②授業内容の見直し、③第二外国語の見直し（必修化も含め）、④外国語を母語とする教員の採用、⑤入学ガイダンスで第二外国語の履修を強く勧める、⑥非常勤講師の給与体系の見直し、等である。こういった提案、要望は、余り実現していないように思われ、今後更なる努力の積み重ねが望まれる。

同じ此の年度より、所員の意思疎通を計るために「ニューズレター」が発行されるようになった。

エッセイ、語学教育、研究に関する提案、問題提起、学会動向等を中心に、所員間のコミュニケーションが計られることを願っている。

1988年度には20号館（語学演習棟）が完成し、3階に「外国語研究センター」が移転して新しいLLも設置され、新しい出発となった。神奈川大学創立60周年記念号から『言語研究』と名称を改めた。本研究紀要第11号の「異文化理解とコミュニケーション」、第12号の「言語論的転回の意味するもの」といった講演要旨、更に、掲載論文からも察せられるように、言語学プロパーに限らず、関連諸科学的な色彩が濃くなりつつあることは、現代言語論の特色でもあり、また、語学教育の巾を広げるためにも意義深いものであると思われる。

---

こういった動向を受け、1988～9年頃から従来の狭義的な語学教育中心から「ことばと人間」の問題を広く関連語科学から研究し、「人間教育としての言語教育」への発展を志向し、1990年度より「言語研究センター」(Institute for Language Studies)と名称を改めた。共同研究班を結成し、研究発表も不定期に行っていたのであるが、今のところ軌道に乗っているとは言い難く、どのように活性化するかが今後の課題の一つである。唯、機器備品を購入し、研究体制に入っている班もある。

1990年度より、活躍中の学者を外国から招聘し、昼間、主として学生を対象に二回の講演、夕方は学内外の専門家を対象に二回、連続講演会を開催している。現在まで、米国、カナダ、中国、英国等から学者を招き、第二言語習得論、社会言語学、意味論、心理言語学、日本語学等、巾広い分野にわたって、最近の研究動向に関する情報を得る機会が与えられ、内外に好評を博している。

主として神奈川県中学、高校英語研究会の先生方からの要望で、中、高、大の英語教育の問題を共に考える場が欲しいということで、1990年度より「英語教育研究大会」を秋に開催している。県下中、高で英語教育に携わっている卒業生も含め、

熱心な英語教師が一堂に会し、内外の講師共々、英語教育の今日的課題を取上げ、講演、ワークショップ等で研究協議するプログラムで、すでに三回行って来ている。適切なテーマの設定、参加者の問題意識の吸上げ、取上げ方等、今後現場の声も聞きながら、よりよい大会にするためにきめ細かな検討を重ねる必要がある。

1990年度から始まった三つ目の新しい企画は、一般市民へのサービス並び生涯教育の一環としての「語学教養講座」である。2月末から3月初旬にかけての10日間で、1990年度は英語、西語、中国語の三カ国語で、1991年度はそれに仏語、独語、ロシア語、朝鮮語の四カ国語を加えた七カ国語で開催した。1992年度には更にイタリア語も加えて八カ国語の講座を提供することになっている。この講座も、期間が短か過ぎてまとまったことができない等、企画の全体的な見直しの必要が指摘されている。

運営委員や所員の皆さんの御協力により、ささやかな改革を行って来たのであるが、すでに述べたように、今後更に充実発展させるべき点も多く、新所長山口健治教授に大いに期待したい。最後に、御尽力を賜った多くの方々に深甚の謝意を表し度い。